

2000.4/29-30



天候 > 快晴

29日

千畳敷 > 極楽平(登り) >
 三ノ沢カール(滑り) > 極
 楽平(滑り) > 千畳敷 > 千
 畳敷カール(登り) > 宝剣
 山荘 > 中岳(登り) > 木曾
 駒ヶ岳(登り) > 頂上木曾
 駒山荘(泊)

30日

頂上木曾駒山荘 > 木曾
 駒ヶ岳(滑り) > 中岳(滑
 り) > 駒飼の池(滑り) >
 宝剣山荘 > 千畳敷カール
 (滑り) > 千畳敷

メンバー

| | | |
|------|-----|----|
| 大塚賢一 | 45才 | CL |
| 木倉博 | 37才 | |
| 田中彰 | 26才 | |

氷ノ山の山スキーも終わりを迎える頃、いよいよ日本アルプスの山スキーの幕開けである。当初は御嶽山へ行く予定であったが、未だシュプールを刻んでいない中央アルプスへと足を運んだ。

この中央アルプスは交通機関を利用すれば、ごく簡単に2612mの高台(千畳敷)まで運んでくれるのである。中央高速の駒ヶ根ICで下車、バス、ロープウェイを利用する。

この連峰へは'97,'98,'99と3年連続に来て色々なコースからの縦走を加藤氏とともにこなしているが、スキーを担いでの登山は今回が初めてである。

「アカン！ 装備変更や、スキー、ストックをザック固定、ピッケル着用」、「エエーッ、こんな所でザック固定出来んワ、地獄の底に滑落してまうワ」、「なんとか足場を固めて実行やっ！、深呼吸して絶対に焦るなよっ！、ピッケルを突き刺しキックステップで三点支持やっ、板を岩にぶつけてパランス崩すなよ！、落ちたら確実に死ぬぞっ！。オレのトレースの後を確実に来いよっ。」

29日

60人乗りのロープウェイ内は一般観光客に混じり我々山スキーヤーや登山者がちらほらである。千畳敷駅に着くと登山パーティーはすべて入山チェックが行われる。この千畳敷カールは今までに幾人もの人々を飲み込んでいる「雪崩れの巣」なので厳しいもの当然だろう。当前ではあるがアイゼン、ピッケル装備が無ければ入山が許されない。

10:30 2612m 極楽平登行 アイゼンでスキー引っぱり

雪の量は今年の5月と打って変わっての大雪で18年ぶりの大降雪とのことである。大鳥居の最上部がまるで丸木の腰掛けと化している。

快晴の中、観光客に見守られながら？、シャツ-

枚になりアイゼンを装備して急な極楽平をスキー引っ張りで登っていく。

交通機関でいきなり2612mまで上がって来たせいで高度順化が出来ておらずにいきなりの急登なので心臓が悲鳴をあげて、汗が噴き出している。

昨夜降った雪が、今朝の冷え込みでクラスト状態になり太陽の光を受けて、顔に襲いかかって痛いほどである。

11:10 2850m 稜線到着 スキー

装備変更で荷物をデポし、ものすごく雄大で美しい三ノ沢カール方面に思い思いのシュプールを刻んでどんどん下っていく。上と下でビデオカメラを構えてのドラマ作りも怠らない。

雪質は上部、中部とも良好で雪が緩んできた下部でスキーを外して登り返しである。

12:58 5度 大休止。昼食タイム



青空の中に南アルプス連峰、富士山が雪化粧をして浮かんでいる。北西には御嶽山も迫力をだしている。そんなロケーションの中での昼食のラーメンは極上のうまさがある。



13:45 極楽平滑降

昼食を終え、本日のメイン斜面の極楽平の滑降である。2人のボーダーと一人のスキーヤーが先に滑降を終えシュプールを描いているがどうも難しそうである。

まず、最初にアキラがしたでもビデオ撮りのために滑るがどうしても最初の滑り出しが急で踏ん切りがつかないようである。しかし、ひとたび滑り出すと曲がるきっかけが掴めなくていつものように延々と長い斜滑降である。それでも一転び二転びである。

さあ、準備が整い我々もカッ飛んでいくが、いかんせんクラスト状態の雪に噛みつかれあたふたである。七転八倒のしまつであった。この雪には3人とも歯が立たなかった、加藤氏のいついかなるどんな悪雪でも滑りこなすパワースキーを目指してしるのだがまだまだテクニックが伴わない。

14:00 10度 千疊敷カール登行

気温も上昇してくるにしたがい、両足の太股もパンパンになり再び「ハアハアゼゼ」とつらい登りが続く。しかし、天候に恵まれているので宝剣岳の猛々しいチンネを筆頭



にクーロワール地帯が目焼き付く。

15:13 千疊乗越し到着

最後の急登を息せき切ってやっと登りつめる。ここまで来ればあとは、今日の行動予定は終了に近づいたも同じであると思っていた。

2925 mの中岳を登り、木曾駒ヶ岳をトラバースすれば到着である。

しかし、そうは問屋が卸してくれなかった。このトラバースがくせ者で本来ならザイルを張りフィックスしなければ安全に行けないようなところであった。我々のパーティーはノーザイルなのでアイゼンとピッケルがたよりの世界に30分以上捕まってしまった。「落ち着け！ゆっくりでいいから三点支持で確実に！」幾度となく私の声が地獄谷にこだまする。

このような究極の危険地帯に出くわすと人間本来の性格があらわに出てくるもので、常に今を見極めて冷静に判断し行動しようとする者、CLに従って無言で真剣な形相で行動する者、自分の弱気を沈めようとやたら小言をいう者、誰かとは言わぬがはかなき人間の性である。

17:15 -2度 頂上木曾小屋到着。

究極のトラバースをビデオに収めているとき寒さのせいも手伝ってバッテリー切れになってしまった。一年ぶりに顔を見る山小屋のオヤジに合うと今までの緊張感がほぐれて適度な疲労感に変わっていった。ここの山小屋は加藤氏お気に入りである。わたし達もこの小屋は今までで最高と自負する。小屋自体は別に



頂上木曾小屋にて



究極のトラバース

たいしたことはないのだが、ここのオヤジの容姿とその性格である。商売気はまるでなくていつも謙虚でいてなにか手伝いたくなってしまふのだ。金額も一泊二食付きで6500円の超格安である。昨年泊まった宝剣山荘とは大違いである。

本日の宿泊客は我々を入れて7人である。広島から来た人は木曾福島町方面から9時間かけて、またナチュラルリストの斉藤パーティーは将基頭山方面から一泊かけてと、みな強者ぞろいである。夜は斉藤さん(60才)の19才から登っている中央アルプスにかかる情熱の話しが延々と続き退屈しなかった。

30日

4:30 起床 -8度。

今日もまだ天気は崩れることなく快晴のようだ。昨夜は冬の夜空が静寂となり今朝の冷え込みは一段である。早速にフル装備に身をまとい、カメラを持って外に出ようとするが、入り口の戸が凍ってしまっていてピクともしない。ピッケルで氷を砕きやっこのことで扉を開ける。おかげでご来光に少し遅れてしまった。

中央アルプスの主峰木曾駒ヶ岳2956 mも山頂は1 m以上の雪の下なので今は2958 mといったところである。ここからの展望は360度の大パノラマである。中央アルプス連峰、南アルプス連峰、八が岳、富士山、乗鞍岳、御嶽山、穂高連峰とまだまだ白き山々が顔を覗かせている。

朝食を済ませ、来年は加藤氏復活で必ず一緒に来ます、とオヤジと約束を交わして小屋をあとにした。

7:50 再び木曾駒のピークに立つ。

さあ、2958 mからの最高峰からの滑降開始である。雪質は完全なアイスバーン状態であるがクラストではないので板は回しやすい。アイスバーンにエッジが切り立つ金属音を響かせながら頂上山荘まで一気に滑り降りる、快適そのものである。



桜満開の中央アルプス

8:43 6度 中岳山頂 小休止。

頂上山荘から中岳に登り返し時間も充分すぎるほどあるので、しばし伊那前岳や宝剣岳の雪山に太陽が当たり光りと陰のコントラストダンスに見入ってしまう。なんとも美しい光景である。



千畳敷カールの厳しい登り

9:46 千畳乗越し到着 スキーザック固定

中岳より天狗荘まで滑り込み、ザックをデポして駒飼の池までのすばらしい大滑降を楽しむ。この滑降はこの度で一番のいい雪質でパウダースノーであった。

千畳敷カールの急斜面の滑り出しは、昨日パトロー

PS

今回はエンジョイスキーのはずだったが、それに付いてきたおまけがものすごい究極の体験であった。これも今までの経験があつてこそ無事に事を終えることが出来たと思うしだいである。

この中央アルプスでは10月に猛吹雪に遭遇し、夏には超ロング縦走をこなしヒッチハイクのお世話になり、とインパクトの強い連峰である。



中岳大滑降

ルから登山者に迷惑がかかり巻き込むおそれがあるからさけるように！と忠告を受けていたので200mほど下までスキーザック固定でアイゼン下りである。

注意点で再びスキーを履き最後の滑りの千畳敷カールの大滑降で幕は閉じる。

最後はバス終点地点で「駒ヶ根の湯」の温泉に浸かり2日間の疲れを癒した。この温泉は今しがた滑った千畳敷カールを見ながら温泉に浸かれるのでお勧めである。